原へ、討つて出づ。
尾張の援軍、今はとて、亦、馳せ向ふ。

## 十

參軍、犀ヶ崖を過ぎて、小豆餅の附近に、軍を駐む。
酒井忠次、鳥居元忠、瀧川一益、平手汎秀、佐久間信盛等、右翼たり。
小笠原長忠、松平家忠、本多忠勝、石川數正等、左翼たり。
家康、中軍を率ゐて、後方に在り。
陣を、鶴翼に張りて、待つ。
既にして、甲軍、漸く近づく。
家康、鳥居信元を召して、
『合戰すべきか、引き還すべきか、汝、馳せ行きて、見て參れ』
と命ず、信元、直に、馬を驅つて、馳せ去り、稍〻ありて、還へり來り、
『合戰の儀は、固く、御無用にこそ候へ、甲州勢は、殊の外の大勢にて、備へを、幾段にも、立てゝ候、御味方は、唯、一側のみにて、所詮、比較にもなり候はず、若し、御合戰に候はゞ、敵の祝田へ、押し行くを待つて、段々に備へて、討たせ給へ、只今の御合戰、然るべしとも存じ候はず』
と報ずれば、家康、
『日頃は、役にも立つべしと思へばこそ、大事の使にも、遣はしつれ、それ程、臆病にて、何の役に立つべきや、甲州勢の旗影を見て、腰にても、拔けたるか、爭かで、目の前の敵を、見遁さるべきや』
と叱す、常にもなく、言葉荒らし。
信元、敢て、屈せず、
『御用にも立ち、目も利けばこそ、勝負をも、見立てゝ候へ、御負けにても、戰はせ給はんとならば、それは、御勝手に候、勝負も分らぬ人をこそ、憶病とは申し候なれ』
と言ひ返す、主の大事と思へば、語氣も激し。
家康、尙も、思ひ止まらず、
『半藏、汝、見て參れ』
更に、守綱を顧みて、命ず。

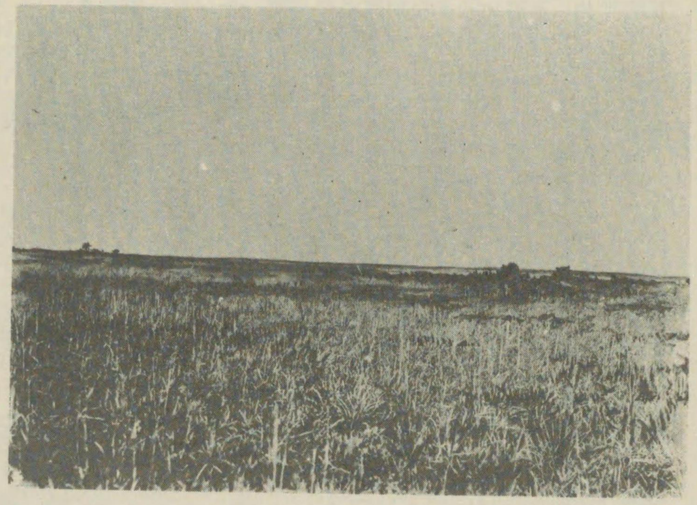




守綱、馳せ行きて、具さに、敵情を見究め、又馳せ還りて、
『今日の御合戰、御味方より、始め給はゞ、必ず、敗軍に候なり』
これも、進戰の不利を說く。
家康、聞いて、益〻怒る。
忠佐、突と、進み出づ、
『左らば、某、見て、參り候はん』
意を決して、馳せ去る。
柴田康忠も、亦、進む。
眞先きに、城を出でたる勇兵三百人、亦、續いて、馳せ進む。
守綱、制すれども、止まらず。
衝突、今は、避くべからず、
『此上は、是非もなし、大久保、柴田を見殺すべきにあらず』
石川數正、亦、一千二百餘人を率ゐて、ドッと、馳せ出づ。

## 十一

信玄、進んで、三方ヶ原に到る、參軍の陣を、望み見て、忽ち行進を止め、二三の部將を留めて、敵を押へ、其儘、進んで、祝田、刑部の方へ、向はんとす。
諸將、進戰を乞へども、信玄、固く許さず。
小山田信茂、第一軍に在り、上原能登を、携へ來りて、
『御一戰、然るべう候、御勝利、疑ふべくも候はず』
と白せば、信玄、
『シテ其證據は』
と問ふ、信茂、膝を進めて、
『能登、犀ヶ崖の方へ進んで、能く見候へるに、德川勢は、如何にも、薄くして、澄み切りて候、それに、織田勢の旗色も、整ひ候はねば、御合戰、必ず、御勝利に候なり』
と說けば、信玄、
『汝の申す所、踏み所あり、左れども、今一度、能く見せん』
と告げ、更に、宇賀信俊を、能登に添へて、遣はす。
稍〻ありて、二人、還り來り、
『愈〻相違候はず、敵勢、如何にも薄く、且、澄み切り



三方ヶ原
遠江國濱名郡三方ヶ原村に在り武田德川兩軍の龍驤虎奮大に雌雄を決せしところ。

て候、御合戰、然るべう候』

と報ずれども、信玄、

『我れ、五十になるまで、未だ敵に、背後を見せたることあらず、若し、不覺を取りなば、後々までの名折れぞ、敵勢、薄しとは云へ、信長の援兵、如何なる所へ、伏せてあらんも、知れじ、それ故にこそ、念にも、念を推すなれ』

と告げて、尙、決せず、馬場信房、進み出でて、

『仰せ、御尤もにこそ候へ、去りながら、此御合戰、十が十一、御勝利にこそ候へ』

と白せば、信玄、今は始めて、心を決す、

『美濃＝信房＝さへ、其通りに存ずれば、合戰、然るべし、左らば、今日の軍、初は、兵衞尉＝信茂＝汝に申し付くべきぞ』

と告げ、信茂を以て、先鋒とし、魚鱗の隊を作つて、進む。

山縣昌景、內藤昌豐、小幡信貞、眞田信綱、高坂昌宣、馬場信房の六隊此れに續く。

武田勝賴、武田信豐、武田信光、穴山信良、土屋昌次、望月信雅、跡部勝資の七隊、亦、此れに續く。

次は、信玄の麾下。

次は、二弟武田信綱、一條信龍、之れを後陣とす。

總勢三萬二千餘騎、逶迤(あい)として、長蛇の如し。





## 十二

甲軍の先鋒小山田信茂、早くも、參軍の右翼織田勢に向つて、戰を開く。

參軍の部將石川數正、亦、進んで、甲軍の右翼小山田昌景に向つて、戰を開く。

戰鬪、忽ち、東にも起り、西にも起り、吶喊の聲、劍戟の響、彼方此方に湧く。

時、正に申の刻、雲影低迷、雨、將さに來らんとす。

信茂、勇を鼓して、奮然として進む、兵鋒、頗る鋭し。

佐久間信盛、迎へ戰ふこと少時、忽ち、敗れて退く。

瀧川一益、亦、續いて、敗れ退く。

平手汎秀、憤然として起ち、

『扨ても、言ひ甲斐なき有樣かな、德川殿の思し給はん所も、耻かしきぞ、進めや者共』

と呼はり、士卒を叱咤して、甲軍の眞中に、突入し、殊死して、戰ふこと少時、身も殪れ、士卒、亦、討たるゝもの、百三十餘人。

尾張の援軍、先づ、盡く敗る。

大久保忠佐、柴田康忠、亦、一戰して、敗れ退く。

甲軍、意氣、益〻振ふ。

酒井忠次、悍然として進み、鳥居元忠、亦、進む。

二人、俱に剛勇、飈馳電擊、忽ち、信茂の兵を擊破し、走るを追うて、進むこと三町。

參軍の右翼、先づ捷つ。

石川數正、騎隊を、先頭に立てゝ、サッと、甲軍を衝き、徒卒、亦、續いて進む、外山正重、槍を揮うて、眞先に戰ふ。

昌景の從士孕石源右衞門、瘡を病んで、行步に艱(なや)む、從兵に負はれて、戰線を出で、這ひ〳〵、進んで、一番槍を着く。

甲兵、皆、善く鬪ふ、穗坂造酒之助、長刀を取つて、縱橫無盡に、薙ぎ立て、向ふところ、皆、靡く。

渡邊守綱、夙に、槍半藏の名を負ふ、斯くと見て、猛然として進む、

『いしくも働く武者振りかな、渡邊半藏守綱を知らざるか』

十文字の長槍を揮うて、忽ち、造酒之助の長刀を、叩き落し、曳と一聲、ドツと、馬より、突き落す。

參將小笠原長忠、本多忠勝、青木廣次、中根正照等、亦、各〻競ひ進む。

甲軍、勢、漸やく怯む、奥平貞勝、菅沼正定、菅沼定忠等、山家三方の兵、先づ潰ゆ。

昌景の兵、亦、支へ得ずして、サツと、引き退くこと、三四町。

參軍の右翼、亦、捷つ。

## 十三

捷を第二合に期するは、信玄の兵法、

『憎き敵の振舞かな、イデ〳〵、一戰に、蹴散らさん』

馬場信房、部下を提さげて、代りて、參軍の右翼を衝く。

武田勝頼、亦、側面より、進んで、參軍の左翼を擊つ。

甲軍の鋭鋒、當るべからず、青木廣次、奮鬪して、先づ死し、中根正照、亦、苦戰して、敗れ死す。

石川數正、善く戰ふ、馬より、飛び下り〳〵、折敷きて、敵を拒ぎ、又擊つて、勝頼を、卻けんとす。



山縣昌景、忽ち、取つて返へして、戰ふ。

小山田信茂、亦、返へり戰ふ。

甲軍の鋭氣、益〻加はる、參軍の將士、心血、皆、湧く。

戰鬪、今や、益〻烈し、虎、吼ゆる處、風起り、龍、嘯く處、雲むら立つ。

信玄、機を見て、忽ち、麾を揮ふ、

『素破や、懸かれ〳〵』

軍令一下、諸隊、皆、動く。

一軍、二軍、麾下の陣々、次を逐うて、戰線に現はれ來る、宛がら、油雲の岫より出づるが如し。

參軍、望み見て、俄かに、色めく。

## 十四

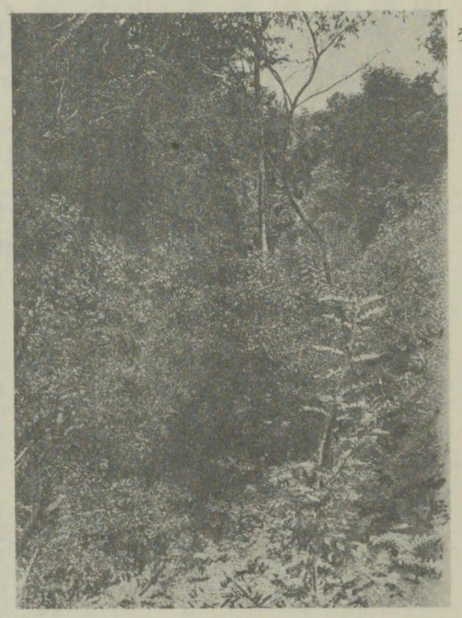
參軍の勇士成瀨正義、鳥居信元の二人、互に、死を約す、

『今や、約束を果たすべき時機ぞ』

各〻馬を驅つて、甲軍を衝く。

是れより先き、七月八日、正義、信元、及び榊原忠政、天野政景、加藤長次、高力半九郎等の諸士、松平康純の邸に會す。





犀ヶ崖
遠江國濱名郡濱松の北十町の處に在り穴山信良の士卒陷りて死せしところ。

談、偶〻乘馬の事に及ぶや、正義、信元の一族、馬を買はんことを約して、買はざりしことを、語り出でて、嘲けり笑ふ。

信元、冷然として、

『參河武士も多き中に、渡邊半藏＝守綱＝は、槍先の功名、數多きより、槍半藏と呼ばれ、服部半藏＝正成＝は、平生、試斬りを好み、特には、戰場の駈引、鋭きより、鬼半藏と呼ばれ、又米津藤藏＝勝政＝は、騎卒の使方に、巧みなれば、馬藤藏と呼ばれて候、成瀨殿は、馬の賣買に、巧みなれば、人は、博勞藤藏殿と申すげに候、我等は、何の異名をも呼ばれず、口惜しうこそ、存ずるなれ、去りながら、我が槍先に向ふものは、稀れなり、あはれ、大剛の敵に、出會はゞやと存ずるにこそ』

ヂロリと、正義の顏を、見遣れば、猛氣の正義、爭かで、默して止むべき、

『舌長し四郎右衞門、武士たるもの〻武藝は、何が珍らしきぞ、今までとても、ツイゾ、汝に劣りたることあらず、イザ、立ち會へ、見事、我れに、屈(かが)まして、見すべきぞ』

と罵りつゝ、血相變へて、ヂリ〳〵と、詰め寄る、殺氣、忽ち、座に充つ。

信元、物をも言はず、脇差を拔きて、サツと、斬り付くれば、正義、ハツと、身を反はしさま、亦、スラリと、脇差を、引き拔く。

『素破や事ぞ』

衆、驚いて、二人を押し隔つ。

正義、面色、火の如し、

『我れ、身を反はしたればこそ、無事なれ、我が座席を、斬りしからは、我れを斬れるも同然、八幡、堪忍なりがたし、但し、此處にて、私に相果てなば、殿には不忠、我等も、不覺の譏を免かれず、今にもあれ、合戰の起らば、二人共、思ふ存分、功名を較べて死なん、如何に四郎右衞門、ヨモ、異存あるまじ』

と言ひ放てば、信元、打ち頷づく、

『言ふにや及ぶ、武士たるもの、何條、一死を恐るべきや、勇士、私に犬死せんは、君への不忠ぞ、好し〳〵、此後、合戰の起らば、共に、勇を爭うて、屍を晒らすべし』

と答へ、快然、一笑して、分かる。

爾來、風雲、日々に、急にして、甲軍、終に、城外に來り迫り、ざゝんざの濱松、今や、風の音も、穏しからず。

『今こそ、約束の時なれ』

二人、各〻勇んで、戰場に出づ。

戰鬪少時、甲軍の勢、鋭く、參軍、アワヤ、崩れんとす。

是に至りて、二人、猛然として、甲軍の群中に、突入し、勇を奮うて戰ふ。

勇士、死を決すれば、勇氣、更に、益〻加はる。

正義、敵首三級を斬つて、太刀先に貫き、馳せ還りて、信元を索む。

信元も、亦、三首を提さげ、還りて、正義を求む。

二人、ハタと逢ふ、互に、首を見て、莞爾と、打ち笑む、

『扨ては、相高名に候ひしよ』

サッと、首を投げ棄てゝ、復た敵陣を衝く。

正義、山縣昌景を、討たんと欲して、遮ぎる敵を、突き除け〳〵、進んで、其馬前に現はる。

馬場信房、武田信豐、穴山信良の兵、横合より、馳せ來り、槍を攢めて、正義を仆す。

信元、復た一敵首を取つて、正義を索む、其既に、戰死せしを聞いて、涙を流す、

『成瀨は、誠の勇士ぞ、申す言葉を、違へずして、討死せしことの不憫さよ、イデ〳〵、我れも、約束を果たすべし』

又も、馬を返して、無二無三に、信玄の麾下を衝く。

信玄の近臣土屋直村、遮ぎり鬪ふ。

信元、三尺五寸の太刀を、揮うて、發矢と、眞甲を打つ。

甲、堅うして、傷つかず、直村、眼、眩んで、眞逆様に、馬上より落つ。

信玄麾下の兵百餘人、槍ずくめに、信元を刺して、殪す。

## 十五

二勇士、既に仆れて、參軍の形勢、今や、益〻危ふし。

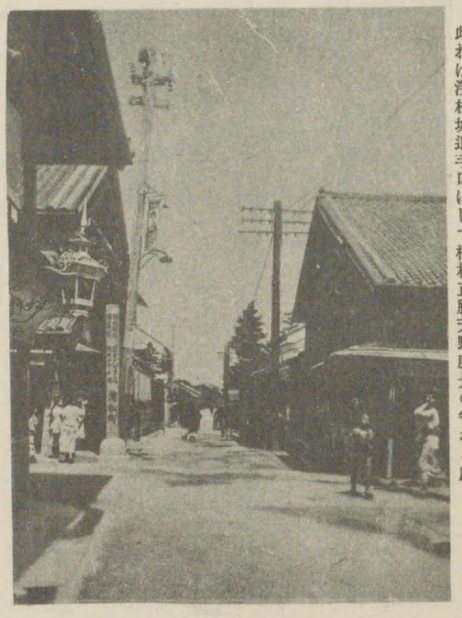
諸將、各〻部下を、勵まし〳〵、拒ぎ戰ふ、人は仆れ、馬は斃れて、今は、支へ戰はん力もあらず。

家康、敵の奮進するを見て、少しも騷がず、

『素破や、軍は、勝ちたるぞ、アレ見よ、敵は、我が形略に乘つて、來れるぞ』

と大音聲に、呼はれば、今や、崩れんとせし參軍、忽ちに鎭まる。家康、ソレと見て、

『左らば、引けや』



濱松城追手口址

此れは濱松城追手口にして植村正勝天野康景の守れる處。

と令し、徐かに、兵を退く。

參軍、今や、盡く引き退く、甲軍、勝に乘じて、急に追ふ、

家康、屹と、左右を顧みつゝ、

『誰れか、殘りて、一防ぎせよ』

と命ず、將士、皆、戰ひ疲かる、誰れ一人、我れ留まらんと言ふものあらず。

内藤信成、突と、進み出づ、

『某に、仰せ付けられ候へ』

と言ふや否や、部下を率ゐて、留まり戰ふ。

衆寡、勢ひ敵せず、士卒、忽ち討たれて、死するもの十餘人。

敵兵、益〻迫る。

信成、且つ戰ひ、且つ退く。

水野清久、勢ひの急なるを見て、返し戰ふこと、七たび。

松平眞乘、本多廣孝、本多重次等、亦、殿戰しつゝ退く。

本多忠眞、旗を護りて退く、敵の追擊、益〻急なり、

『今は、是れまでぞ』

旗を、二本杭に建てゝ、返へし戰ひ、自ら槍を捻つて、六七人を斃す。

敵、益〻群がり來る。

忠眞、槍を揮ふの餘地なし、乃ち槍を捨てゝ、刀を拔いて戰ふ、復た三人を、斬つて捨て、更に、敵中を衝いて死す。

米津政信、病を強めて、軍に從ひ、馬側に在りて、近侍の士を指揮す、事の急なるを見て、亦、奮鬪して死す。

將士、續々、仆るゝもの、三百餘人。

天野政景も死し、加藤長次も死し、榊原忠政、高力半九郎、松平康純も、亦、死す、是に至りて、正義、信元と與に、康純の邸に、會せしもの、殆んど、皆、死す。

敵の追擊、益〻急なり、家康の勢ひ、漸く危ふし。

岩室勘右衞門、忽ち、取つて返へし、槍を揮うて、七八人を斃し、終に、力盡きて殪る。

鈴木久三郎、剛勇無双を以て聞ゆ、家康の側に、馳せ寄りつゝ、

『御采配を賜へ、潔よく、討死して、御心安く、落し參らせん』

と白せど、家康、肯んぜず、

『汝を討たせて、一人、落ち延びんこと、思ひも寄らず』

と拒む、久三郎、心、焦ら立つ、

『愚かなる仰せかな』

と言ひつゝ、無理に、采配を、奪ひ取つて、留まり戰ふ。

家康、乃ち退く。

既にして、馬、疲れて、進まず。

松平康親、戰ひ疲れて、林中に憩ふ、斯くと見て、走り出





づ、

『君の御鎧は、赤くして、目立ち候なり、イザ、某のと、取り換へ候はん』

手早く、鎧を脫ぎて進め、從兵十二三騎と與に、近づく敵を擊つて追ひ卻け、又取つて返へして、家康の側に到る、

『イザ〳〵、此馬に召されて、退かせ給へ』

濱松城玄默口

此れは濱松城の玄默口にして鳥居元忠渡邊守綱等の突進しつゝ馬場信房山縣昌景等を追ひ卻けし處。

我が馬を進めて、追ひ來る敵を拒ぐ。

家康、乃ち復た馳す。

敵の一騎、前途に立つて待つ。

家康、弓を取つて、射て斃す。

日、漸く暮れて、雨、シト〳〵と、降り出づ。

會〻敵の一將、跡より馳せ來る、是れぞ、大剛の城景茂、

『素破や、剛敵ぞ』

家康、屹と、身構ふ。

景茂、何の氣も、附かずして、引き返へす。

家康、ホッと、息して、又馳す。

既にして、敵兵、續々、追ひ來る、

『今は、遁れんやうもあらじ、此上は、潔く、戰つて、死せんこそ好けれ』

家康、今は、死を決し、忽ち、馬首を回して、敵に對す。

敵も、亦、次第に近づく。

今ぞ、家康一期の危機。

## 十六

夏目正吉、留まりて、濱松城を守る、參軍の敗報を聞いて、

急ぎ、戰場に馳せ向ふ、隨ひ來れるもの、二十六騎。
家康の、今や返へし戰はんとするを見て、馳せて、馬側に到る、
『疾く〳〵、城に入りて、後日の合戰を、期し給へ』
と白せど、家康、聞かず、
『イヤ〳〵、城下にて、斯程までも、敗軍しながら、何とて、人に面を對はさるべきや、且や、勝ちに乘れる敵を、背後にして、城まで到らんこと、思ひも寄らず、敵陣に、馳せ入つて、快よく、討死せんこそ、本望なれ』
と告げ、直に、馳せて、敵を衝かんとす。
馬丁、緊かと、轡を控へて、放さず。
『放せ〳〵、其處放さずや、我が命は、今日を限りぞ』
家康、足を擧げて、ハタと馬丁を蹴る。
正吉、慌てゝ、馬より、飛び下り、グツと、馬の口を攫み、
『假初に、命を捨つるは、匹夫の業にこそ候へ、進むべきを見て、進み、退くべきを見て、退き、軍慮を運らし、智略を施して、始終の勝を、完うせんこそ、大將の業に候なれ、疾く〳〵、御馬を、濱松の城に、入れ給ふべし』
と說けども、家康、尙も、聞かず、
『我れの、此處に在ることは、敵、能く知れり、遁げんとて、爭かで、遁げらるべきや』
と告げて、聽かず、正吉、首を掉りつゝ、
『そは仔細候はず、恐れながら、某、御名を冒して、此處に討死仕つり候はん、左すれば、敵も、疑ひ候はじ』
と言ひ、自ら家康に代りて、死せんと欲す。
家康、尙も、聞き入れず。
敵兵、早、ヒシ〳〵と迫る。
正吉、無理に、馬首を捻ぢ廻して、濱松の方へ、押し向け、鞭を擧げて、シタタカに策つ。
馬、忽ち、跳つて、馳せ出づ。
家康、今はとて、其儘、濱松に向ふ。
敵兵、斯くと見るより、爭うて、追ひ來る。
『御邊は、疾く〳〵、御供し給へ』
正吉、畔柳武重を、急き立て〳〵て、家康の跡を、追はしめ、自ら部下二十六騎と與に、敵前に、進み出で、
『我れこそは、德川家康なれ』





と呼はりつゝ、十文字の槍を揮うて、敵中に躍り入り、見る〳〵、二人を、突き倒す。
敵兵、家康と聞くより、其前後を圍んで、擊つて、正吉を殪す、時に、年五十五。

## 十七

家康、馳せて、犀ヶ崖に到れば、大久保忠世、跡より、駈け來り、
『味方の兵を、集めて、濱松へ入らせ給へ』
と白し、三旗を、崖の左右に、建つれば、敗兵、望み見て、續々、來り集まる。
既にして、敵、亦、近づく。
忠世、銃を放ちて、敵を卻く。
家康、此隙に、馳せて、城に向ふ、
『追手より、還らば、定めて、驚かん』
態と、城濠の畔を、廻はりて、鹽町口に抵る。
城門、固く、鎖されて、入るべからず。
武重、大音に、
『殿の御歸城に候ぞ、開門々々』
と呼はれば、守門の兵、忽ち、內より、門を開く。
家康、馬上の儘、突と、中に入る。
兵士、再び門を鎖さんとす、家康、手を擧げて、止む、
『後れて、還へるものあるべきぞ、開け置け〳〵、敵、近寄るとも、却つて、計略ありと疑うて、入り得まじ、扨て〳〵、埒もなき軍して、殘念ぞ』
命じて、諸門を開きて、篝火を焚かしめ、馬を下りて、中に入る。
侍女の久野、湯漬を持ち出づ、家康、換へて、三椀を食し、枕を引き寄せて、眠る、鼾聲、雷より高し。

## 十八

諸將士、追々に、馳せ還る。
鳥居元忠、馬籠に於て、返し戰ひ、敵矢に中りて、足を傷つく、二の矢を、射られんことを恐れて、態と、馬より落ち、從者に、扶けられつゝ、城に入る。
石川數正、戰ひ敗れて、退く、從士羽太淸藏、敵の爲めに、追躡せらるゝこと屢次、數正、馬を乘り廻はし〳〵て、助け退く。

邊渡守綱、斯くと見て、

『八幡、見事なり、伯耆殿』

と呼はり、槍を揮うて、敵を追ふ。

其弟政綱、及び一族渡邊直綱、天野又作、佐橋吉久、勝屋甚五兵衞、櫻井勝次等、亦、駈け來りて、敵を追ひ、數正は、鹽町口に退き、守綱等は、玄默口に退く。

松平康安、身に、數創を蒙り、胸に、二矢を受く、自ら一矢を拔き捨て、更に、一矢を拔かんとす、敵兵、既に迫りて、勢ひ頗る危ふし、乃ち矢を握りつゝ退く、會〻識る所の一人、傷つきて、苦しむ、康安、馬上に扶け乘せて、城に入る。

濱松城七間町口
此れは濱松城の七間町口なり。

菅沼定政、敵陣を冒して、奮戰し、大久保康忠の危急を見て、扶け還る。

大久保忠佐、馳せ還へりて、犀ヶ崖の中に落つ、兄忠世、槍を出だして、援くれば、忠佐、此れに取り縋りて、躍り上り、難なく、城中に退く。

本多忠勝、部下三百騎を率ゐて、徐かに、引き退く、信玄、望み見て、感じ、

『アレは、本多中務か、あの樣なる體に、引き取るものは、外にはあるまじ、勇士ぞ、討つべからず』

棄てゝ、其退くに任かす。

松平康親も、還へり、鈴木久三郎も、亦、還へる。

諸士、次第に、歸り來れども、城中、尙、安んぜず。

高木廣正、會〻信玄の近臣大隈入道の法師首を、提さげ來りて、實檢に供ふ、容貌魁偉、尋常の人に似ず、家康、見





て悅び、

『汝の武勇は、人の知る所ぞ、信玄の首なりとて、名乘りを揚げよ、人心、必らず、鎭まらん』

と命ず、廣正、乃ち其首を、太刀尖に貫きて、走り出で、城中を、馳せ廻りつゝ、大音に、

『高木九助廣正、今日、敵の大將武田信玄の首を討取つたり、見給へや方々』

と呼はれば、城中の人々、皆、大に悅ぶ。

## 十九

家康、諸將を集めて、

『遠江、參河の二國、年々、不作打續きて、我が家中、皆、困窮し、僅かに、稗黍を以て、常食となせる程の始末、所詮、長く、籠城せんことは、叶ふまじ、明日は、信玄の陣中に、切り入つて、潔よく、討死せんと思ふなり、今宵、最後の酒宴を開きて、名殘を惜み候はん』

と告ぐ、今や、國は滅び、家は亡びんとす、諸將、皆、黯然として、涙を呑む、

『假令、百萬の大軍を以て、圍むとも、容易に、落去すべき虞は候はず、左れども、兵粮なきに、籠城して、空しく、餓死せんよりは、花やかに、一戰して、事、成らば、敵を追ひ斥け、成らずんば、潔よく、討死致候はん』

と答ふ、主從、今は、死を決す。

本多重次、殿戰して、後れて、城に還る。

家康、亦、其由を告げ示せば、重次、膝を進めつゝ、

『イヤ、其御氣遣ひ、御無用に候なり、殿の參州を、御手に入れ給へる時、高力、天野、並に重次の三人を、奉行に定めさせ給ひたれば、犬打つ童までも　鬼作左と申し觸らして候、假初にも、一ヶ國を預かり候ものが、何とて、飢饉の憂あることを、覺悟致すまじきや、某は、鬼と呼ばれ候へども、萬一の用意にとて、既に、米穀を貯ふること、七萬石に及びて候、此危急の時節、諸士に與へられんには、兵粮に、不足あるべからず、當城に立て籠つて、嚴しく、防戰し給ふべし、數日を支ふるならば、諸所に、立て籠る御家人共、本城を救はんとて、馳せ來り候はんは、必定に候なり、何ぞ、開くべき運を捨てゝ、無謀の討死を、心掛け給ふべきや』

濱松八幡神社
德川家康戰敗れて退去する時一時此境内に潛みしと傳へらる。

と白す、家康、聞くより、欣然として、

『左らば、大丈夫ぞ、固く、城に立て籠りて、敵を引き受けん、能くせしぞ作左衛門』

と喜ぶ、籠城の決意、忽ち定まる。

諸將士、亦、皆、大に意を安んず。

## 廿

家康、命じて、諸門の守備を定む。

追手口は、植村正勝、天野康景、玄默口は、鳥居元忠、下垂口は、大久保忠世、柴田康忠、山手口は、戸田忠次、鹽町口は、酒井忠次、松平家忠、小笠原長忠、鳴子口は、石川數正、之れを守り、二の丸は、三宅康直、本多重次、飯尾の古城は、高力清長、之れを守る。

諸將、馳せて、持場々々に到れば、諸門、皆、守備なし、唯、玄默口のみ、渡邊守綱兄弟以下七人、固く守る、鳥居元忠、深く、其勞を謝して、此れに代る。

斯かる折柄、敵將馬場信房、山縣昌景の二人、兵を率ゐて、追ひ來る。

昌景、早くも、城門の開けるを見て、冷笑ふ、

『扨ても、城兵の慌てさまかな、城に逃ぐることは、逃げても、門を閉づることだに、忘れしにあらずや、勿怪の幸ひぞ、イザ、攻め入らん』

直に、兵を勵まして、突入せんとす。信房、手を擧げつゝ、

『ヤレ待たれよ山縣、城兵、利を失うて、引き入らば、逸早く、門を閉ぢ、橋を引いて、固く守るべき筈ぞ、却つて、城門を開き、松明を焚けること、何れ、何かの計





略あらん、德川殿は、當世の名將ぞ、猥りに、突き入らば、却つて、過ちあるべし、控へ候へ〳〵』

と制すれば、昌景、實にもと、思ひて、少しく躊躇ふ。

敵ありと見て取れる元忠、

『逡巡せば、敵の勢ひを增すべきぞ、イザ、一當て當てゝ、追ひ拂はん』

守綱等と與に、百餘人を率して、突出し、猛然として、敵を衝く。

元忠、脚の傷、痛みて、奔驅、心に任せず、よろぼひ〳〵、大音を揚げて、指揮す、其聲、破鐘の如し、士卒、聞いて、皆、振ふ。

家康、亦、櫓上より、貝を吹き、鼓を打ちて、兵勢を助く。

信房、昌景の兵、忽ち、崩れ退く。

元忠等、追うて、首を取ること、七十級。

大須賀康高、後れて還り、信房等の退くを見て、大に喜び、銃を發し、槍を取つて、突き懸かる。

甲軍、益〻驚きて、走る。

康高の部下久世廣宣、阪部正定、筧又藏、淺井忠次等、皆、奮鬪して、敵を殪す。

## 廿一

榊原康政の敗れ退くや、甲軍の勝に乘じて、來り攻むべきを察し、背後より、不意に襲うて、敵鋒を挫がんと欲し、兵を濱松城東の西島に伏せて、待つ。

待つて、夜に入れども、甲軍、終に來らず、

『左らば、此方より、押し寄せん』

康政、密かに、兵を進めて、突然、勝頼の營を斫る。

勝頼、戰ひ捷ちて、備を設けず、

『素破や、敵の夜討ぞ』

營中、皆、慌てふためく。

康政、鯨波を發して、縱横に奮擊す、遁げ後れたる參兵、其處此處より、來つて、俱に、力を戮はす。

見る〳〵、首を斬ること、若干級。

『疾く討ちて、疾く引けや』

康政、士卒を指揮して、嚴しく戰ひ、忽ち、サッと、兵を收めて、還る。

勝頼、漸くに、備を立て直せば、敵、既に去つて、影もあ

らず。

甲軍、是れより、益〻警戒を加ふ。

## 廿二

元忠、城に入りて、首級を獻ずれば、家康、深く悅ぶ。

康高、康政の二人、亦、前後、各〻還り來りて、狀を報ずれば、家康、益〻悅ぶ。

此日、節分に當る、敵を受くれども、式を廢せず、

『福は內、鬼は外』

痛める足を、引き〳〵、豆を撒けるは、元忠。

目に見えぬ鬼は、豆を撒きて、拂ふべし、目に餘る城外の鬼を、拂はんは、何の豆ぞ。

大久保忠世、天野康景の二人、暫し、何事をか、呟やき合ふ。

## 廿三

頓て、大久保忠世、家康の前に出でて、

『此儘、引籠り候ては、敵は、明日も、又勝ちに乘り候べし、一夜討ちして、敵の勢ひを、挫ぎ候はん』

と白す、家康、未だ答へず。

酒井忠次、進み出でて、

『某も、夜討ちを掛けんと存じ、間諜を入れて、敵陣を見せ候ひしに、晝間に働きし諸隊は、後ろに置き、新手の兵を、前に備へ候ひぬ、其思慮、淺からず、必ず、防禦の手段も候はん、今宵の夜討、然るべからず』

家康、默然として、兎角の返答をもなさず。

忠世、起ちて、大河內政綱の陣に到り、

『我れ、御前に於て、夜討ちを勸め奉つりしと雖も、酒井、押し止め候へば、兎角の御沙汰に及ばせられず、左れども、此儘に止まんは、殘念なり、御邊の人數をも、貸し給へ、一夜討、致し候べし』

と請ふ、政綱、晝間の戰ひに、傷を負へども、更に、怯める氣色もあらず、

『夜討ちの手段、如何さま、妙計に候なり、今は、刻限も好し、イザ立ち給へ、我れも、同道申すべし』

と言へば、忠世驚きつ〻、

『御邊は、數ケ所の深手を、負ひ給はずや、止まり給へ、爭かで、合戰の叶ひ申すべきや』





と止むれども、政綱、首を掉りて、聞き入れず、

『甲斐なきことを宣ふものかな、斯ばかりの微傷に怯めて、君の大事を、餘所に見るべきや、若し、城內にて、死したらば、如何ばかりか、口惜しからん、討死は、本望に候、イデ、出向き候はん、兎角を言へば、夜も更け候べし』

と言ひつ〻、手早く、疵を包みて、出でんとす、意氣躍々、當るべからず。

天野康景も、亦、城中の士卒を、狩り集めて來る。

士卒、多くは、疲れて、物の用に立たず、勇んで、來り加はれるもの、只、銃手二十四人、步卒七十餘人。

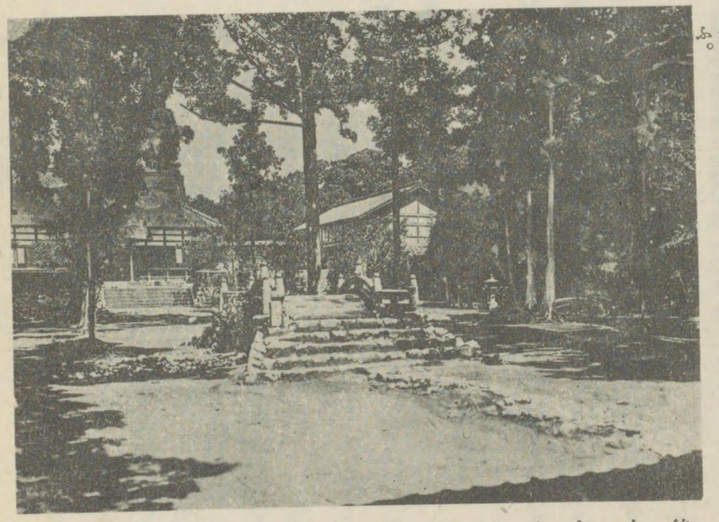
政綱、帖紙を切つて、面々に渡し、

『綿嚙に附けて、合符と致し候へ、駈引は、我が笛の下知に從ひ候へ』

と令し了りて、發す。

天氣、曇りて、夜色、暗し。

甲軍の陣營、犀ケ崖の前面に在り、忠世等は、眞先に立ちて、間道より進む、人馬、肅々として、聲なし。



普濟寺
遠江國濱名郡富塚村大字富塚に在り元と寺島鄕に在りしに大久保忠世等敵陣夜襲に際して之れを燒き拂ふ或は家康退却の際犀ケ崖に僞橋を作り此寺を燒きて敵を誘ひしとも言ふ。

須臾にして、穴山信良の陣後に達す。

人を遣はして、火を普濟寺に縱てば、炎烟、高く、虛空を衝く。

政綱、忽ち、笛を把つて、吹くこと一聲。

二十四人の銃手、

一齊に、火蓋を切つて、ドッと放つ。甲軍の營、俄かに、騷立つ。

政綱、二たび、笛を取つて吹くこと、兩三聲。

七十餘人の步卒、鋒を揃へて、營中に、躍り入り、鯨波を發して、縱橫無盡に、斫り立つ。

甲軍、益〻慌てふためき、誰れ一人、拒ぎ戰はんとするものあらず。

參兵、勢ひに乘じて、敵を追ひ詰め〳〵、奮ひ擊つ。

甲兵、犀ヶ崖に陷りて、死するもの數百人。

叫喚の聲、暗を破つて、物悽し。

他の陣々、皆、靜まり返りて、騷がず。

『敵には、備ありと覺ゆるぞ、深入りせば、過ちあらん』

政綱、又笛を吹くこと數聲、手早く、士卒を收めて、引き還る。

信玄、感嘆、惜かず、

『扨て〳〵、德川は、剛敵かな、晝間の合戰に、好き家來、數多討たせて、城內、左こそ、亂れつらんと思ひけるに、左はなくて、斯くも、夜討を掛けしこそ、意外なれ、今宵の働き、天晴、奇特ぞ』

益〻備を嚴にして、天の明くるを待つ。

戰爭終りて後ち、崖中鬼火燃え、亡魂迷ふとの噂高し、家康、聞いて、憐れみ、僧に命じて、之れを弔ひ、且、七月十三日より、十五日まで、念佛踊を催ほして、其靈を慰め、武士、多く此れに加はる、是れ、今の盆踊の濫觴なり、此盆踊に限り、武士、面を包みて、加はれば、咎めなかりしも、是が爲めなりと云ふ。

## 廿四

既にして、東天、漸く白み來る。

東門の外、忽ち、鐵蹄の聲起る、

『素破や、敵ぞ』

城中、忽ち、騷ぎ立つ。

一將、馬を門外に立てつゝ、

『こゝ開け候へ、石川日向守＝家成＝掛川より、馳せ參じ候なり』

と呼はれば、城兵、聞いて、勇み立つ、

『扨ては、味方ぞ』

忽ち、門を開きて、迎へ入る。

三方ヶ原千人塚
三方ヶ原東南の丘上に在り德川家康の敵屍を葬りし處。

石川家成は、數正の叔父なり、夙に、忠勇を以て聞ゆ、是に至りて、城中の士氣、頓みに振ふ。

家康、櫓の上に在りて、甲軍の動靜を見る、本多忠勝を顧みて

『如何に、敵の氣を知れりや』

と言へば、忠勝、畏まりつゝ、

『信玄、當城を攻め候はず、必ず、人數を、引き揚げ候はん、大軍の後に、輕重乏しく、且、軍霞に、煙なきこと、其證據に候なり』

と答ふ、家康、聞いて、打ち頷づく。

## 廿五

二十三日、信玄、犀ヶ崖の營に在りて、前日の敵首を檢す。

馬場信房、山縣昌景以下の諸將、戰ひ捷ちて、意氣昂る、

『此勢ひに乘じて、攻め給へ、濱松を取らんこと、何の雜作も候はじ』

と勸むれば、高坂昌宣、

『イヤ〳〵、城は名城、大將は名將に候、此れを攻め落すには、定めて、二十日も掛かり候べし、其間に、信長、大軍を卒して、後詰仕つり、上杉謙信、亦、兵を上野、又は信濃へ出だして、遙かに、應援致し候はゞ、結句、御退陣の外は候まじ、首の一つも取れば、二十も、三十も取つたやうに、言ひ觸らす尾張勢に候、必ず、武田勢を、擊ち退けしなど、申し觸らし候はん、斯くては、御弓矢の譽も、傷つき候べし、此一勝の勢を以て、御退陣あらせ給はんこそ然るべけれ』

と述べ、信長の兵數を、擧げ示して、懇々、攻城の不利を說く。

信玄、亦、家康の侮りがたきを知る、

『實に、彈正の申す通りぞ、明日は、陣を引き候はん』

と告げ、二十四日、陣を刑部に退く、其後殿は、昌宣、部伍整然として、亂れず。

家康、望み見て、

『扨ても、見事や、我れ、命存へて、信玄の如くに、人數を繰り廻はさば、此世の名聞、此れに過ぎじ、斯かる大將は、敵ながらも、毒殺など、仕たくはあらじ』

と語り、深く、用兵の妙を感ず。

後、數日、信房、參兵を捕へて、此事を聞き知り、信玄の前に出でて、

『德川殿は、當年三十一歲かと覺え候、年こそ若けれ、當時、日本國にては、越後の謙信、參河の家康、此兩人の外には、剛の大將は候まじ、此度、三方ヶ原にて、討死の參河武者、下々まで、勝負せざるは、一人も候はず、其證據は、此方に轉びたるは、俯向になり、濱松の方へ轉びたるは、仰向になり居り候なり、五年以前、駿河へ御出陣の時、遠州一國を、相違なく、家康に任せ給ひ、交を結び、緣を結びて、家康を、御先手となされ候ひなば、今頃は、大方、中國、九州までも、御旗風に靡き、コヽ、五三年の間には、日本も、大抵、御手に附き候ひたらんものを、返す〳〵も、口惜しうこそ候へ』

と述べ了りて、憮然たること少時。

信玄、亦、默然として、一語なし。

信玄、刑部に駐まりて、年を送り、天正元年正月七日、兵を野田城に進む、是れぞ、信玄最後の軍。

## 野田城址（のだじやうし）

武田信玄發病の地

野田城址は、參河國南設樂郡千郷村大字根古屋に在り、永正年中の創築に係り、菅沼氏の居城たり。

天正元年正月、武田信玄、自ら大兵を率ゐて、來り圍む、城將菅沼定盈、堅守して、屈せざること三旬餘、水道を





絶たるゝに至りて、終に、城を開く。

## 一

陣中には、年の暮もなく、歲の首もあらじ。

武田信玄、三方ヶ原より、退きて、陣を刑部に留むること數日、其年も暮れて、天正元年の春は來りぬ。

山家三方の將奧平貞勝、菅沼正定、菅沼定忠等、信玄の前に出でて、

『某等、去年、御味方に從ひ奉つり候ひてより、德川殿の御憤り深く、濱松へ入れ置き候人質を、青松葉にて、燻ぶし殺すげに候、哀れ、賢慮を運らせられ、助け得らるゝならば、御助けあらせ給へ』

信請へば、信玄、暫し、小首を傾く、

『好し〳〵、其儀ならば、野田の菅沼を、生け捕つて、人質と取り換へん、家康の大切に存ずる新八郎＝定盈＝の事、ヨモ異存を申すまじ、案內候へ』

と告ぐ、計略、頓みに決すれば、正月七日を以て、刑部を發す。

氣賀を過ぎ、姫街道を經て、東參河に入り、十一日を以て、野田城に迫る。

姫街道
遠江國濱名郡三方ヶ原より參河に通ずる姫街道なり武田信玄の兵を野田城に進むる時通過せし處。

城の南方には、豐川の急流ありて、容易く、兵を進むべからず、信玄、乃ち石田を上りて、佐々良瀨、黑坂の兩

方より、軍を進め、本營を、轟目木の砦に置く、總勢三萬餘騎、山谷、皆、盡く兵。

城將菅沼定盈、夙に、驍名あり、濱松の援將松平忠正、設樂貞通と與に、堅く守る、城兵、僅に四百餘人、死を視ること、鴻毛よりも輕し。

『イザ來よ、甲斐勢』

皆、城を枕に、倒れんと欲す。

甲軍、早、ヒシ〳〵と、城外に迫る、

『唯、一擊ちに、擊ち破れや』

鐘を打ち、螺を吹き、矢を放ち、銃を發す、猛氣、山をも拔かんばかり。

城兵、少しも怯まず、鯨波を發し、矢石を放つて、拒ぎ戰ふ。

甲軍、攻むること數日、城、尙、陷いらず。信玄、焦ちて、

『高が小城の一つぞ、疾く、攻め落せや』

と指揮すれば、甲軍、益〻振ひ、或は、竹把を取つて進み、或は、龜甲車をこぢて迫る、連日連夜、攻擊、餘力を遺さず。

定盈、忠正、益〻士卒を鼓舞して、拒ぎ戰ひ、使を遣はして、急を濱松に告げ、且、

『城の運命、長くも候まじ、疾く〳〵、後詰あらせ給へ』

と請へば、家康、使を延き見て、

『七日が程、悃へよ、我れ、自ら赴き援くべし』

と諭し、直に、兵五千を率ゐて、豐川の西岸笠頭山に陣す。

敗殘の兵は、新捷の敵に、當るに足らず、家康、乃ち小栗重常を、岐阜に遣はして、援兵を乞ふ。

曩に、平手汎秀の三方ヶ原に於て、戰死するや、信玄、其首を、信長に送りて、絕を示す、信長、陳疏百端、只管、其怒を釋かんとす、是に至り、將軍＝義昭＝と隙ありと稱して、敢て、家康の乞ひに應ぜず。

家康、今は、奈何ともすべからず、終に、退きて、吉田に入る。

孤城、今や、一兵の援なし、爾かも、將士、尙、固守して、屈せず。

## 三

甲軍、益〻攻擊すること數日。





城、尙、陷いらず。

一夜、風烈しく、雨、亦、急なり。

甲軍、暗に乘じて、西郭に迫る。

守將菅沼加賀、大醉して、警備を怠る。

甲軍、難なく、躍り入りて、忽ち、外郭を奪ふ。

定盈、忠正、乃ち退きて、牙城を保つ、將士、尙も、屈する色なし。

甲軍、乃ち鹿砦を樹て、木柵を繞らして、堅く、出入を絕ち、更に、坑夫を、城の東南に、遣はして、水道を斷つ。

城中、水、忽ちに、涸れて、士卒、漸やく、渴に苦しむ。

城の運命、今や、旦夕に迫る。

## 四

伊勢の人村松芳休、城中に在り、夜々、笛を吹きて樂しむ、切々たる聲は、水の咽ぶが如く、嘹々たる音は、風の吟ずるが如し。

甲兵、皆、出でて聞く。

一日、兵士、紙を貼けたる竹竿を、携へ來り、小丘の上に、建てゝ去る。

鳥居三左衞門、城中より、望み見て、芳休に向ひ、

『信玄殿は、笛を好ませ給ふと聞く、あの符こそ、信玄殿の座所に候はめ、今宵は、別けて、心を込めて吹き給へ、我れに、一つの手段あり』

と告げ、直に、銃卒苅部太郎右衞門を召して、

『今宵は、あれなる竹を狙ひて、打ち候へ、吳れ〳〵も、過つべからず』

と命ず、太郎右衞門、百發百中の妙あり、晝間より、狙ひを定めて、待ち構ふ。

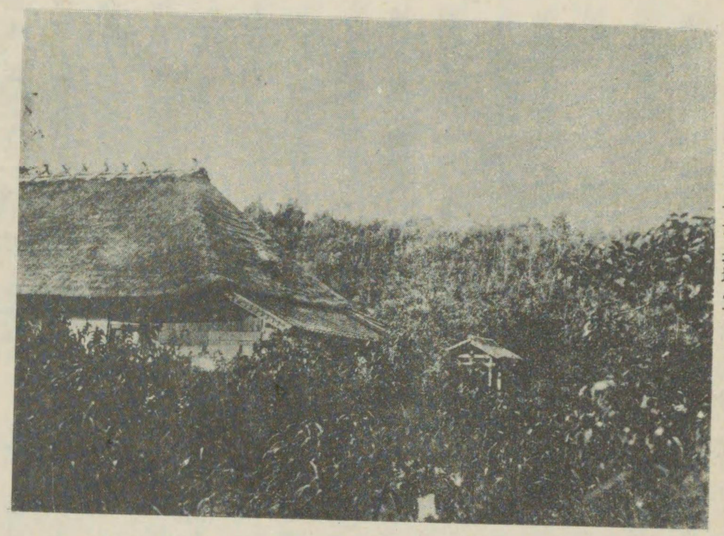
既にして、日、漸く昏る。

芳休、復た笛を把つて、吹き初む、實にや、一聲、高く喚んで、百龍、皆、驚く。

黑き人影、忽ち、竹竿の下に動く。

待ち構へたる太郎右衞門、一發、ズドンと、打つて放てば、黑影、其處より、此處より、竹竿の下に、來り集まり、頓て、一團となりて、薄れ行く、跡は、寂々として、聲もなし、

『扨ては、正しく、命中せしぞ』



野田城址
參河國南設樂郡千郷村字根古屋に在り左方の家屋は法性寺の庫裏にして右方の丘上を城址とす。

太郎右衛門、獨り、小躍りして、悅ぶ。

五

其翌くる日、山家三方の將、矢文を、城中に送りて、開城を勸む。定盈、忠正の二人、乃ち使を遣はして、

『我等二人、切腹致し候べし、城中の諸人は、助けさせ給へ』

と請へば、信玄、

『城だに明くれば、仔細なし、一同の生命は、助け得さすべし』

と告げて、之れを許す、二人、乃ち衆を率ゐて、城を出づ。

信玄、兵を伏せて、二人を捉へ　長篠に送りて、二の丸に幽し、

『如何に、我れに從はんや、所領は勿論、何事にても、望みに任すべし』

と論せども、二人、聞き入れず、

『忠臣は、二君に仕へずと申し候ものを、何條、暫くの命を惜みて、操を變じ候はんや、速かに、檢視を賜へ、潔よく、切腹致し候べし』

と答ふ、信玄、其志を感じて、許さず、使を家康の許に遣はして、二人と、山家三方の人質と、交換せんことを求む。

家康、異議なし。

二月十五日、家康、兵を附して、人質を、送り還せば、信





玄も、亦、兵二千を以て、二人を送り來り、廣瀨川の畔に於て、首尾よく、交換を終ふ。

家康、二人を召して、深く、其忠節を賞し、更に、其領邑を加ふ。

信玄、野田城を收めて、急に、長篠に退き、尋で、鳳來寺に移りて、日を送る。

信玄、疾を獲たりとの報、早くも、遠近に傳はる、

『扨ては、愈〻それに相違あらじ』

太郎右衛門、益〻悅ぶ。

太郎右衛門、尋いで、癈を病んで歿し、子孫、亦、皆、斯疾に罹る、人、皆、名將を打ちたる天罰なりと言ひ傳ふ。

實は信玄疾に罹りしにて、銃傷を負ひしにはあらず。

## 夢山（ゆめやま）

武田信玄埋骨の地

夢山は、甲斐國甲府市の北方に在り、其西南麓に、萬年山大泉寺あり、西山梨郡相川村に屬す、大永元年、武田信虎の創建に係り、天桂禪師、之が開山たり、域内に、信虎の墓、及び武田氏の靈廟あり、廟中、信虎、信玄、勝頼の木像を、安置せり。

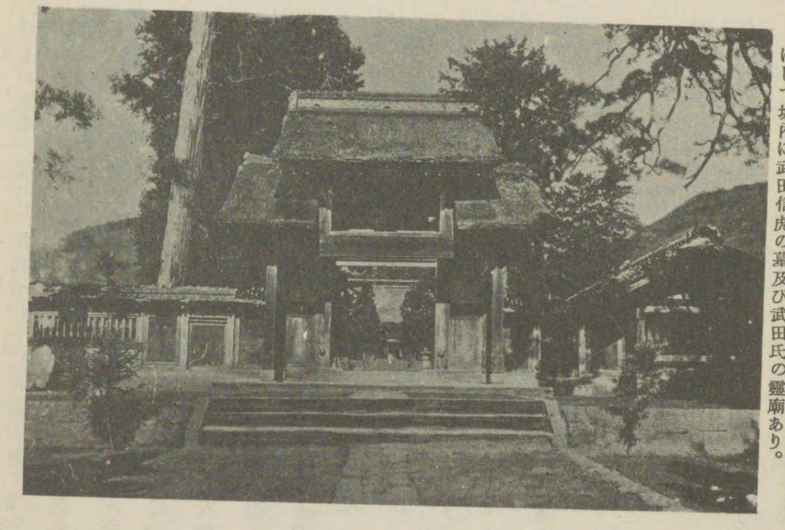
大泉寺裏字岩窪に、信玄の墓あり、高一丈一尺、表面に「法性院機山信玄之墓」の九字を刻す、安政八年の建立に係る、古碑は、高二尺四寸にして「法性院機山大居士神儀、天正元年癸酉四月十二日病死矣、右三年隱密云々」の文字を刻す、信玄の信濃國根羽に於て、卒するや、密に、其遺骸を、土屋右衛門尉昌次の邸に送りて、塗籠の中に藏め、三年を經て、改めて、邸中に葬むる、此地、卽ち是れなり、毎年四月十二日、例祭を行ひ、賽人、雜沓す、明治三十九年八月、堂宇を建て、修理を加ふ、地は、甲府の北八町の處に在り。

一

武田信玄、終生の志業は、天下に覇たるに在り、天正元年正月、參州野田城を攻め、更に、吉田城を略して、濱松の押へとなし、直に、西して、旗を京師に建てんと欲す。

英雄も、二竪には、勝ちがたし、信玄、圖らずも、病に罹

り、鳳來寺に留まりて、靜養すること、若干日。
病勢、日を逐うて、加はるばかり、急に、癒ゆべき模樣もあらず、
『此上は、信州伊奈に於て、靜かに、保養せんこそ、好けれ』
信玄、兵を諸所に留めて、伊奈に、引き還す。
途中に、數日を費やし、四月十二日を以て、根羽に着すれば、症勢、頓に、革まる。
信玄、自ら起たざるを知り、命じて、子弟、及び諸將を招く。
子勝頼、弟信綱、信龍、甥信豐、穴山信良、並に馬場信房、內藤昌豐、山縣昌景、高坂昌宣以下、歷々の諸將、何れも、其枕邊に集まる。
信玄、色は靑ざめ、氣は衰へて、復た屠龍搏虎の力もあらず。
諸將、皆、黯然として、涙を呑み、誰れ一人、口を開くものあらず。
信玄、重き枕を擡げて、一同を、見廻はす、



萬年山大泉寺
甲斐國山梨郡相川村に在り甲府市の北方なる夢山の西南麓にして城內に武田信虎の墓及び武田氏の靈廟あり。

『信玄、一期の運命、今日を限りと覺ゆるなり、一たび、旗を京師に建てんと、思ひ極めながら、終に、其志を達せざりしこそ、





無念至極なれ』
語らんと欲して、感慨、先づ湧く、
『若し、信玄死せしと聞かば、隣國の者共、競うて、境を侵さんは定ぞ、兎角は、固く祕めて、世に聞かせざらんに、若くはあらじ、五年以來、判を据ゑ置きし白紙、五百枚もあらん、諸方より、使札を賜らば、此紙に、返書を認めて、與ふべし、信玄、存生せりとだに聞かば、假令、病中に在りと云ふとも、決して、手を出だすものあるべからず、皆、信玄に、國を取られざる用心をのみなさん、弔ひは無用ぞ、供養は要らぬことぞ、具足を着せて、諏訪の湖へ沈め、三年目の亥の四月十二日を以て、弔ひ候へ、其間、能く〳〵、國を鎭め、備を整へんこと、肝要ぞ』
と告ぐ、心に懸かるは、唯、國の行末
『家督には、四郎勝頼の子太郎信勝の、十六歲になるを待つて、立て候へ、其間は、四郎に、陣代を申し付くるぞ、但し、武田の旗を持たんことは、無用なり、況して、我が孫子の旗、勝軍地藏の旗、八幡大菩薩の據旗は、何れも、一切、持つべからず、太郎信勝初陣の時、孫子の旗を殘して、餘の旗を出だすべし、四郎は、是れまでの如く、大の字の據旗にて、出で候へ、又四郎法華經の母衣は、左馬頭＝信豐＝に讓るべし、諏訪法性の兜は、四郎着候て後、太郎に讓り候へ、左馬頭にも、左衞門太夫＝信良＝にも、賴み候ぞ、四郎を、屋形と思ひて事へ、又太郎は、當年七歲なれども、信玄同樣に心得、十六歲の時に、家督に直し候へ』
と語る、遺言、尙、盡きずして、呼吸、漸く苦し。

## 二

信玄、稍〻ありて、又、
『信玄の望みは、天下に、旗を建つるに在りしも、憖じ、中途にして、果てんよりは、寧ろ、唯今、死して、信玄存命ならば、京都へ上り申すべきものを、など、諸人に批判せられんこそ、優しなるべけれ、熟〻考ふるに、我れ、信長、家康など、果報の強き者共と、取り合ひを始めたればこそ、一入、早く、命をも縮めしと思ふなれ、信玄に比ぶれば、信長は十三、家康は二十一、謙信は九

つ、氏政は十七の年下にして、何れも、皆、信玄の末を待ち受けしものぞ、四郎は、謙信には十六、信長には十二、氏政には八つ、家康には四つの年下なれば、其果報の過ぐるを待ち候へ、果報に、年を寄らすは、虚飾、榮耀、奢侈の三つぞ、吳れ〳〵も、我れより、合戰を焦せることあるべからず』

と告げて、先づ、勝頼の無謀を戒め、更に、進んで、四隣諸將の心事に說き及ぶ、

『謙信は、勇武の將にして、武道の心掛け深し、頼むとさへ申せば、必ず、信義を盡し候はん、左樣に申しても、苦しからざるは謙信ぞ、信長とは、切所を構へて、長く、對陣を張り候へ、彼方は、大軍にして、特には、畿内、近江、伊勢等、遠方の人數なれば、必ず、無理なる働きを、仕掛くべく、其機に乘じて擊たば、之を追ひ崩さんこと、難からじ、家康は、信玄死せしと聞かば、駿河までも、働き候はん、左すれば、人數を出だして、打ち取り候へ、氏政は、信義の心乏し、信玄の死を聞かば、人質をも捨てゝ、寢返りを打たんこと、必定ぞ、小田原は、無理に掛かつて、押し潰すとも、左まで、手間は、取れ申すまじ、總じて、敵より、無理なる働きをなさば、持の内へ、引き入れて、有無の一戰に及び候へ、將士、心を一つにして、戰はゞ、假令、信長、家康、氏政の三人、一つとなつて、掛かるとも、此方の勝利、疑ひあらじ、此儀、能く〳〵、心得候へ』

と戒む、敵を知り、己れを知る、流石に、名將の用意、疎かならず、

『逍遙軒＝信綱＝は、今宵、甲府へ、使に行くと稱して、立ち出で、從者をば、土屋右衞門尉＝昌次＝の所へ預けて、密かに、立ち戻り候へ、信玄公御煩ひに付、甲府へ御歸陣と、申し觸らし、逍遙軒を、駕籠へ乘せて、甲府へ還へし候べし、此年頃、信玄の顏を、聢と、見しものあらねば、我れと、逍遙軒とを、見分るものあるまじく、何れも、逍遙軒を見て、信玄は、存命なりと心得候はん』

と言ひ終りて、目を閉ざす。

臨終の期、今や、近づきぬ、吐く息よりは、吸ふ息のみ多し。



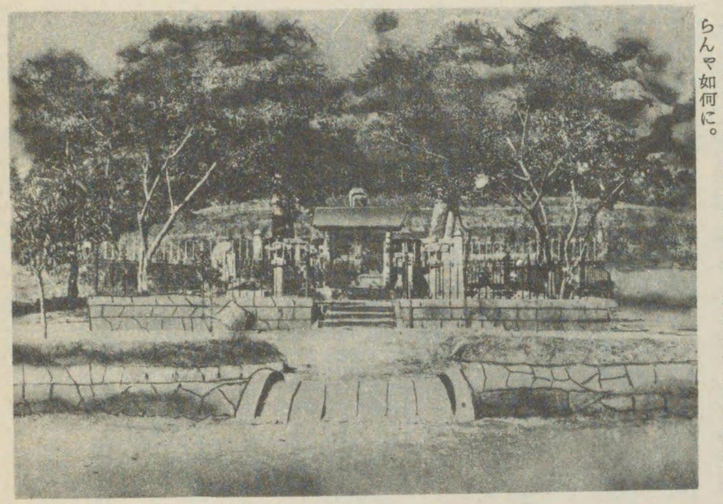


諸將、默然として、言葉なし、一座、肅として、秋の如し。

頓て、信玄、赫と、目を開きて、

『三郎兵衞、三郎兵衞＝昌景＝其方、明日は、旗を瀨田＝近江＝へ建て候へ』

と告ぐ、



武田信玄の墓
夢山の麓大泉寺の裏宇岩窪に在り英雄長へに眠る處夢安からんや如何に。

昌景、ハッと、頭を下ぐ、

『御諚、畏り奉つりぬ』

と答ふる聲も、自から涙に沾ふ、哀れ、信玄の精神、既に亂る。

稍〻ありて、信玄、忽ち口を開き、

大底還他肌骨好　不塗紅粉自風流

と一喝し去りて、空しく、息絶ゆ、享年、五十又三、諸將、心に泣けども、眼に泣かず、密かに、遺骸を、夢山の麓、昌次の邸に送りて、塗籠の中に藏む。

鴻圖、未だ成らずして、雄心、先づ灰と作る、英雄の志業、實にや、夢よりも淡し。

## 三

密事ほど、傳はり易きはあらず。

秘めに秘めたる信玄死去の報、早くも、遠近に傳はる。

北條氏政、斯くと聞きて、獨り頷づく、

『信玄は、野田にて、銃丸に中りしとも言ひ、病に罹れりとも噂す、如何さま、死去したらんも、知れじ、兎も角も、實否を、探り見ばや』

岡江雪に、旨を授けて、甲斐に遣はす。

江雪、甲府に到りて、信玄に、面會を乞へば、

『易き程の事に候、但し、病中なれば、都合を見計らひ、寢所にて、御目に懸かり候はん』

と告げ、夜陰を以て、江雪を延見す。

江雪、導かれて、病牀に到れば、其枕邊には、屏風を建てて、燈火、影、自から暗し、

『氏政殿には、無事か、此方の病氣、左したる事にもあらず、頓て、全快せん』

など言ふ其聲、其顏、紛ふ方もなき信玄、

『扨ては、訛傳なりしよ』

流石の江雪も、一杯、喰はされて、小田原に還り來り、其旨、早速、披露に及びぬ。

信玄と見しは、卽ち逍遙軒信綱。

## 四

此年九月、上杉謙信、春日山の城中、水の間に在り、膳に向ひて、箸を把る。

會〻甲州に出だせる間諜、馳せ來りて、

『信玄殿には、確かに、四月十二日を以て、御他界あらせ給ひぬ、勝頼殿こそ、血氣の強將に候へ、四天王と呼ばれし馬場、山縣、內藤、高坂の四人、專ら心を合はせて、勝頼殿を助け候へば、領內、至極靜謐に候なり』

と報ずれば、謙信、聞いて、驚く、

『ナニ、信玄、死去致されしとナ』

忽ち、箸を投げ棄てゝ、ハラ〳〵と、涙を流す、

『年來の敵ながら、坂東の弓矢柱とも申されし名將なるに、扨て〳〵、殘り多きことかな』

暫し、默然として、言葉なし。

頓て、荒尾一角、河田豐前を召して、

『信玄は、天下の英雄なり、今日より、三日が間、家臣共の家に、音樂を禁じ候へ、但し、農人、商家には、構ひなし、是れ、強がち、信玄を敬するにはあらず、弓矢神への禮ぞ、侍所より、觸れ渡さんは、事、餘りなれば、兩人より、其れ〳〵、緣々を以て、申し聞かせ候へ』

と告ぐれば、家臣、皆、哀悼の意を表す。

武田信玄の像
是れは赤穗の義士大石良雄の畫くところ東京芝區高輪の泉岳寺に在り。

## 五

德川家康、濱松に在り、亦、信玄の訃を聞いて、嘆息しつつ、

『扨ても、近頃、痛ましきことかな、信玄の如き弓矢の大將は、古今に、稀れなり、我れも、若年の時より、信玄の如くに、取り習はんと、萬に心付けたること多し、信玄こそ、誠に、我が爲めの弓矢の師なれ、今は、絕交の時なれば、弔の使者には、及ばずと雖も、名將の病死を喜ぶことあるべからず、我が心底、此の如し、家中の面々とても、其心得あるべし、總じて、隣國に、強敵あるは、國の幸ひぞ、其鋒先を恐れ、其嘲笑を耻ぢて、武藝を勵み、政道を正しうするは、味方長久の基ならずや、信玄の如き剛敵を失はゞ、自から弓矢の嗜みも鈍り、政道の心掛けも、怠らんに、其死去を喜ぶの道理あるべからず』

懇々として、說き示せば、將士、聞いて、感嘆し、皆、深く、信玄の死を悼む。

## 六

信玄死して後三年、天正四年四月に至りて、始めて、喪を發す。

此月十五日、高坂昌宣、跡部勝資、同勝忠の三士、昌次の邸に到りて、塗籠を開けば、信玄の心魂、既に、去れりと雖も、五體、尙、存す、宛ども、壺中に在りて、眠れるが如し。

三士、滴る涙を、袖に受けつゝ、厚棺に移し藏め、其翌十六日辰の刻を以て、改めて、夢山の下に葬むる。

山には、雲宿し、樹には、風騷ぐ、英雄の魂や、長へに返らず。

## 槇島城址

足利義昭敗亡の地

槇島城址は、山城國久世郡槇島村に在り、宇治橋の西北、十町ばかりの處にして、東に、宇治川の流あり、西に、巨椋池、及び泥沼あり、古は、其南北に、宇治川の支流ありて、巨椋湖に通じたるを以て、自から一洲をなせりと云ふ、今は、堤防ありて、南は、宇治町、北は、向島町に通ず、之れを槇堤と稱す、其長五十町。

槇島城は、永正年間、弘中兵部なるもの、居りし處、後、槇嶋昭光なるもの、此處に居る、天正元年七月、將軍足利義昭、此島に據り、織田信長の爲めに、攻め落されて、天下を失へるところ、城址は、田圃となれるも、所々に、礎石あり。

一

古より、庸主、直言を忌み、今に、良臣、嫌忌を蒙むる、織田信長、爾來、淺井、朝倉の兩家と、屢〻干戈を交ゆると雖も、未だ之れを討滅するに至らず、百方、苦心經營する折柄、計らずも、將軍義昭と、矛盾を來すに至れり。

信長の勢威、今や、日に張り、月に加はりて、隱然、天下の一大勢力を爲せりと雖も、其心、唯、義昭を輔翼せんとするの外、復た一點の野心をも有せず。

義昭、亦、其身の今日あるは、一に信長の力なるを思うて、之れに信賴するの心深く、曾ては、信長を尊んで、冠するに、父の字を以てせしことさへありき。

義昭、若し、永く、此心を失はずんば、其身の幸ひなるべきに、却つて、信長を誅滅せんとするの志を起せしこそ、是非なけれ。

抑〻義昭は、智もなく、勇もなく、才もなく、德もなし、其心、邪慾に耽りて、其行、正道に違ふこと多く、決して、天下を統ぶべき器にあらず。





信長、深く之れを憂ひて、懇〻諫爭すること、數度に及ぶ。義昭、闇愚にして、曾て、信長の苦言を容れざるのみならず、却つて、憎惡の念を懷くこと、尋だしく、終に、其擁立の功を、忘れて、

『信長は、慮外の臣なり、之れを除かずんばあるべからず』

と決意し、密使を、諸侯に遣はして、信長を誅滅せんことを命ず。

さなきだに、信長の勢力、日々に、膨脹するを見て、密に、不安の念を懷き、憎疾の心を有せる諸侯は、皆、之れを機として、信長を討滅せんと欲す、越後の上杉謙信の如き、甲州の武田信玄の如き、安藝の毛利大膳大夫元就の如き、何れも、

『上意、畏まり奉つり候』

と答へて、此れに應ずるに至れり。

信長の烱眼、夙に、之れを看破せりと雖も、敢て、怨みず、慍らず、諫むべきは諫め、輔くべきは輔けて、輔翼の任を盡さんと欲し、其後も、尙、十八ケ條の諫狀を捧げて、其非違を、匡正せんと欲す、其心を苦しめること、至れりと謂ふべし。

然るに、義昭、曾て、之れを聽かず、益〻信長を除かんと欲して、終には、天下の廣きも、一身を容るゝの地なく、終に、淪落の客となりて、亡するに至りしこそ、果敢なけれ。

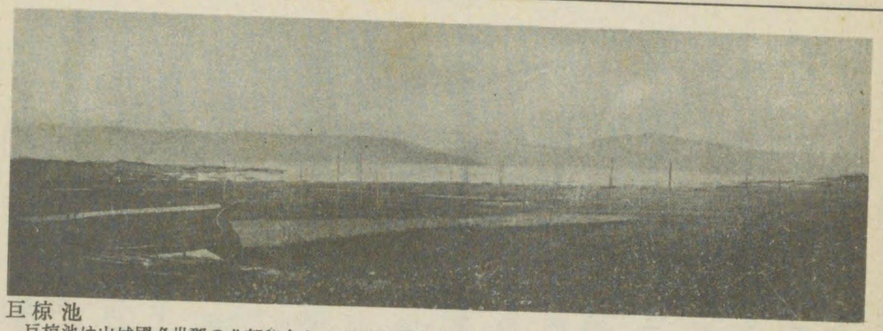
淵の爲めに、魚を驅るものは獺、湯武の爲めに、天下を驅るものは、桀紂なり、今や、信長の爲めに、天下を驅るの義昭あり。

二

義昭の密旨を奉じて、眞先に、信長を討滅せんと計れるものを、甲州の武田信玄となす。

信玄、固より、天下に志あり、信長の我れに親緣を結びて、其鋒を避けつゝ、頻りに、武を近畿に用ひて、其威を張るを見ては、其意、頗る平かならず。

嚮には、姉の子今川上總介氏眞を逐うて、駿河を略し、更に、德川左京大夫を討つて、參遠二州を併はせ、尙、信長と絶ちて、旌旗を、京畿に樹てんと欲す。



巨椋池
巨椋池は山城國久世郡の北部に在りて周圍四里餘に及ぶ槇島城は此池の東に接する槇島に在りしなり。

信長、固より、之れを知ると雖も、當時、畿内には、三好の殘黨あり、江州には淺井あり、越前には、朝倉あり、加ふるに、石山、長島の門徒、亦、法衣を褻げて、抗抵せるの時なるを以て、辭を卑うし、禮を厚うして、只管、信玄の歡心を、繫がんことを計る。

是時に方り、將軍義昭、密に、定福院、並に大和淡路守を以て、信長誅滅の事を懇囑せらる、信玄たるもの、爭でか、遲疑せん、奇貨、居く可しとして、直に、之れを諾し、淺井、朝倉、及び叡山と、謀を合はせて、東西より、信長を挾擊せんと欲す。

淺井、朝倉の二家、固より、弱敵にあらず、更に、甲州の勁敵を加ふるに至りては、信長の爲めには、實に、一大危機なりと謂はざるべからず。

されども、機略縱横の信長、別に、危惧せず、運を天に任せて、泰然たり。

元龜三年十一月中旬、信玄、三萬の大軍を率ゐて、遠州に向ひ、行く〳〵、多々良、飯田、二俣の三城を拔き、更に、進んで、味方ヶ原に向ふ、勢ひ、破竹の如し。

家康、援を信長に請ふこと、急なり、信長、乃ち佐久間右衞門尉信盛、平手甚左衞門汎秀、瀧川右近將監一益に、兵一萬を附して、赴き援けしむ。

十二月二十二日、家康、兵、八千を率ゐて、信玄を味方ヶ原に、迎へ擊ち、大に敗れて、濱松に還る。

信長の兵、畏縮して進まず、汎秀、大に怒り、銃手二百人を、魚鱗に備へて、信玄の中軍を、猛擊し、小山田備中守昌行を擊つて、之れを走らし、更に、馬場美濃守信房と戰うて、此れに死す。

信玄、乃ち汎秀の首を、岐阜に送りて、信長を責む。

信長、尙も、織田掃部助を遣はして、陳謝する所あり、信玄、一書を贈りて、絕を示す、中に、

『近年、邪欲を存せられ、逆儀、漸々と現はれ候事、縱へば、蜜裏に、砒霜あるが如く、錦中に、毒石を包むに似たるものか』

との句あり、將軍義昭、其秘計を掩はん爲めに、陽はに、和解を計る。

信玄、聽かずして、信長の五罪を數む、信長、亦、信玄の八罪を擧げて、之れを劾し、兩家の關係、愈〻絕つ。

## 三

武田信玄、既に、信長と絕つ、是に於てか、信長を擊滅せんと欲し、天正元年正月七日、自ら兵を率ゐて、甲府を發し、先づ、參州野田の城を攻む。

淺井、朝倉の兩將、及び石山、長島の兩門徒等、信玄の來るを待つて、四方より、信長を攻擊せんと欲し、各〻兵衞を整へて、時機の來るを待つ、將軍義昭、聞きて、

『信長を誅滅するの時機は、今日に在り』

と思惟し、急に、敎書を諸將に下す、三好左京太夫義繼、和田伊賀守惟政、其參謀たり。

飛報、頻々として、岐阜に達すれども、信長、敢て、慍らず、

『此上とも、理を盡して、辯疏し、穩便の御沙汰あらんことを、願ひ奉つるの外なし』

と思ひ、村井民部丞貞勝、島田所之助、朝山日乘の三人を、使者として、

『信長、公儀に對して、少しも、疎略を存じ奉つらず、御追討の儀は、幾重にも、御宥免あらせ給ふべし、誓紙にもあれ、人質にもあれ、御指圖のまに〳〵、差上げ申すべし』

と哀願すれども、義昭、今は、益〻圖に乘りて、イツカナ承引せず、堅田、石山の二城を設けて、士卒を配置し、洛中、洛外に、兵粮矢錢を課して、愈〻信長を征討せんとす。

今まで、一意、恭順を表したる信長、之れを聞きて、決意する所あり、

『洛中、洛外に、兵粮矢錢を賦課して、諸民を虐げ給ふこと、誠に、嘆息の至りなり、此上は、諸勢を進めて、此悪政を除くの外あるべからず』

と思ひ、柴田修理進勝家、丹羽五郎左衞門長秀、明智十兵衞光秀、蜂屋兵庫頭頼隆の四將に命じて、先づ、二城を、攻略せしむ。

二月二十日、四將、各〻兵を率ゐて、岐阜を發し、越えて二十四日、石山の城を攻む。

時に、城郭、未だ全からず、守備、未だ整はず、守將光淨院、忽ち、城を開きて、降を乞ふ。

勝家、乃ち城に入りて、京師の援兵に備へ、他の三將は、直に、進んで、堅田の城を攻む。

城兵、奮戰すれども、敵せず、二十九日、城、終に陷る。

四將、既に、二城を略す、光秀、乃ち坂本の城に、留まりて、京師に備へ、勝家以下の三將は、岐阜に歸りて、狀を信長に報ず。

是時に當り、信玄は、野田城を攻めて、志を得ず、急に病を發し、歸國せしと雖も、復た何時、再び出陣するやも、知るべからず、故に、信長、未だ出馬すること能はず、尙、岐阜に在りて、暫く、形勢を窺ふ。

## 四

人生の志業、兎角に、蹉跎なり易し、武田信玄、大軍を率ゐて、參河より、尾張に入り、信長を滅して、長驅、京師に上らんと欲す、然るに、中途、疾んで、甲府に還り來り、徐かに、治術を加ふること數旬、三月九日に至りて、漸く、病牀を離るゝことを得たり。

覇氣勃々たる信玄、

『此上は、一日も早く、出馬して、信長を滅ぼさん』

と焦り立ち、其翌十日、早速、出師の準備を命ず。

斯かる折柄、伊勢の前司北畠中納言具教、其長臣鳥屋尾石見守を、使者として、

『我等、織田上總介に、宿怨あり、若し、御上洛あるに於ては、御渡海の場所に、如何程なりとも、船艤して、待ち候はん、早々、御出馬ありて、上總介を、誅罰せられ候へ』

と申入るれば、信玄、





『實にも、渡頭に船とは、此事なり』

と悅び、厚く、石見守を饗應して、伊勢に還へす。

續いて、長島の門徒も、使者を以て、同樣の意を通じ、淺井、朝倉、及び石山よりも、各〻特使を以て、其出馬を促がすこと、急なり。

信玄、益〻悅びて、今は、一身を顧みるの遑まもあらず、俄かに、宿將、老臣を、召し集め、

『上方筋の諸將、我等に應援するに於ては、信長を誅滅せんこと、三月を過ごすことあるべからず、尾州より、京師までの間には、多少、我等を遮ぎる敵あらんも、固より、義もなく、勇もなき上方武士なり、何の憂ふることかあらん、鎧袖一觸すれば、忽ちに、潰へ走らんこと、疑ふべからず、本國より、尾州までは、左馬介＝信豐＝と、右衞門大夫＝一條信龍＝とに、守備せしめ、別に、一手は、勢州北畠家の兵船に乘りて、長島より、上陸し、行く〳〵、敵を破つて、一時に、旗を帝都に立てん、多年の宿望を達すること、正しく、今日に在り』

と告げ、三月十五日の早天、自ら甲信上毛三州の精鋭、三萬六千餘騎を率して、甲府を發す、豪宕たる意氣、既に、敵を呑む。

今や、信長一期の大事なり、自ら大軍を率して、之れを防がんと欲し、前軍、早、既に、衝突す。

然るに、信玄、信參の境、波合に抵りし時、俄然、疾再び發し、終に、四月十三日を以て歿す。

## 五

信長未だ其眞相を知らず、信玄の急に退陣せし由を聞きて、其意を安んじ、

『さらば、此隙に、京都の始末を付けん』

と思ひ立ち、三月二十五日、急に、軍を率ゐて、京師に向ふ、其動作、例に依りて、敏活を極む。

二十七日、進んで、逢阪に到れば、細川兵部大輔藤孝、荒木信濃守村重の二人、出で迎ふ。

二人は、將軍義昭の重臣なり、信長を誅滅するの謂はれなきを、苦諫すれども、義昭、卻けて、納れず、二人、其人に君たるの器なきを知り、信長に降らんとして、出で來れるなり。

信長、大に悅びて、俱に、東山知恩院に入り、具に、將軍の密謀を聞き、其恩賞として、藤孝には、名物の脇差、村重には、鄕の刀を賜ふ。

信長、既に、知恩院に陣す、其諸軍は、白河、粟田口、祇園、淸水、六波羅、鳥羽、竹田のあたりに、充滿して、兵威、頗る振ふ。

信長、心に、義昭の悔心あらんことを思ひ、使者を遣はして、和議を乞へども、義昭、頑として、許さず。

信長、今は、止むべからず、四月三日、洛外の民家を、燒燬しつゝ、洛中に、馳せ向ふ、其軍勢、雲霞の如し。

信長、今は、義昭の漸く嗾臍せんことを思ひ、再び使者を遣はして、和議を乞へども、義昭、尙、肯んぜず。

『今は、是非に及ばず、唯、干戈に訴ふるの外なし』

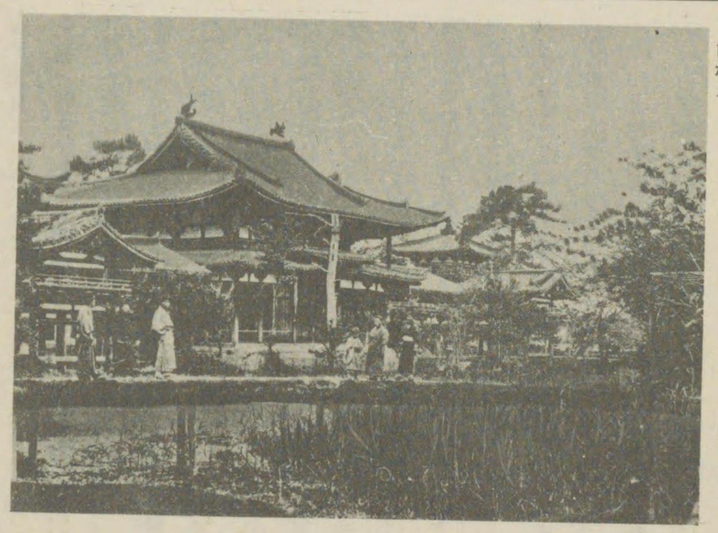
と思ひ極め、其翌四日、上京の民家を、燒き立て、進んで、義昭を、二條城に、圍むこと數匝。

義昭、城上より、望見すれば、極目、兵ならざるはなし、義昭、今は、始めて、畏怖の心を起し、

『斯くては、如何なる堅陣強兵と雖も、之れを支へんこと、叶ふべからず、此上は、早く、和睦せんに若かず』

と思ひ、急に、使者を遣はして、和議を求む。

信長、悅びて、之れに從ひ、六日、其兄津田三郎五郎信廣を、名代として、二條城に遣はし、



平等院
槇島城は宇治橋の西北十町ばかりの處に在り織田信長の軍は平等院の艮より此門前の宇治川を渡りて槇島城に殺到せしなり。



『和睦の儀、御聞き濟みの段、有りがたき仕合せに、存じ奉つる』

との御禮を言上し、是れにて、和議、全く調ふ。信長、乃ち其翌七日、京都を發して、軍を班へす、丹羽五郎左衞門長秀を召して、

『公方家、當方の武威に恐れて、御和睦ありしと雖も、頓て、再び事を起さるべし、其時には、前敗に懲りて、瀨田、山田、矢橋の邊に、人數を配らるべし、我れは、朝妻より、湖水を渡りて、入洛すべければ、豫ねて、大船十餘雙を、支度し置くべし』

と命じて、岐阜に歸る、信長は、眞に未然を知るの明あり。

## 六

信長の先見、神の如し。

將軍義昭、一たび、信長と和せしと雖も、之れを忌むの心、益〻深し、此年の秋、又々、信長を誅滅せんと欲し、

『曩には、此地に居りたればこそ、失敗もしつれ、此度は、要害の地を占めて、諸國の味方を、召し集めん、公方の威を以て、一の信長を誅するに、何か有らん』

と思ひ極め、七月朔日、俄かに、二條を出でゝ、宇治に到り、槇島の城に入りて、兵を募る。

此報、岐阜に達すれば、信長、卽時に、兵を集め、五日、岐阜を發して、佐和山の城に入る。

丹羽五郎左衞門長秀、豫め、十餘雙の大船を、艤して待つ。

信長、此れに乘じて、湖上を渡り、六日の辰の刻、坂本に達するや、直に進んで、京都に入り、洛中、洛外の民家を燒きつゝ、二條の城に迫る、其敏速、測知すべからず。日野大納言輝貞、藤原宰相永相、伊勢伊勢守、三淵大和守の四人、留まりて、城を守る、大に怖れて、降を乞へば、信長、之れを許して、先鋒に加へ、十六日、更に、槇島城に向ふ。

時に、宇治川の水量、大に加はりて、渡涉し易からず、諸軍、之れを見て、意、稍〻沮む、猛氣の信長、

『古の人も鬼神にあらず、渡れば、何どか渡れざらん、諸人にして、渡り得ずんば、信長こそ、先づ、渡るべけれ』

と呼はれば、諸軍、今は、猶豫すべからず、先鋒稻葉伊豫

守長通父子を始め、次第に、兵を進めて、平等院の丑寅より、馳せ進む。

梶川彌三郎、先鋒の陣に加はる、自ら先登せんことを期し、疾くより、來つて、此處に在り、長通の旗影を、見るや否や、

『宇治の先陣、昔は、高綱、忠綱あり、今は、梶川彌三郎こそ、一番なれ』

と呼はりつゝ、サツと、馬を乘り入るれば、長通の兵、我れも〳〵と、乘り入り〳〵、激流滔々たる宇治の川瀨を亂りて、平等院の門前に上陸すると齊しく、早、進んで、火を諸所の民家に放つ。

武井肥後入道夕庵、信長の馬前に在り、漠々たる黑煙を、望み見て、

『扨は、先陣は、早、川を渡りしとこそ、覺え候へ、然るにても、何者か先登しけん』

と申せば、信長、卽座に、

『一定、稻葉の與力梶川彌三郎にてあらんぞ』

と言ふ、果して、其言の如し、人、以て神となす。

## 七

槇島城は、宇治川と、巨椋湖の中間に在り、宇治川の支流、其左右に通ずるを以て、自から一洲の形をなす。

信長の諸軍、ヒタ〳〵と、川を渡り、各〻鯨波を發して、大手、搦手より、押し寄す、其勢ひ、宛ながら、怒濤の岸を拍つが如し。

城兵、死力を盡して、奮鬪すれども、信長の諸軍、之れを事ともせず、前軍、後軍、相呼應して、無二無三に、攻め寄せて、復た呼吸を繼ぐべき猶豫をも與へず。

中にも、柴田修理進勝家、佐久間右衞門尉信盛、蜂屋兵庫頭長賴の三將、最も奮進し、支ふる敵を、突き伏せ、斬り伏せ、首を取ること、百五十級。

勢ひに乘じて、益〻突進し、外郭を破却して、むら〳〵と、闖入し、火を諸所に放つて、本城に迫る。

義昭、今は、防戰せんこと、叶ふべからず、終に、使者を以て、

『此上は、城を開き候はん、命ばかりは、繼ぎ給はるべし』





と請ひ、槇島の城を出でゝ、普賢寺に入る。

義昭の信長を討たんとすること、兩度に及びしと雖も、信長、尙、之れを死に致すに忍びず、

『兎も角も、信盛、秀吉の兩人、好きに計らへ』

と告げて、其處置を、信盛、及び木下藤吉郎秀吉の二人に命ず。

秀吉、乃ち義昭を護りて、普賢寺を出で、津田より、尊延寺を過ぎて、河內の若江城に送る、城主三好左京大夫義繼は、義昭の妹婿なり。

渡邊宮內少輔なるもの、比叡山の麓一乘寺に據り、山本對馬守なるもの、靜原山に據りて、俱に、義昭に應ず。

信長、兵を遣はして、一乘寺を略し、更に、靜原山を圍む。

二十一日、信長、乃ち兵を收めて、京師に還り、梶川彌三郎を召して、宇治川先登の功を賞し、生食增と稱する名馬を與ふ。

信長、洛中、洛外を燒燬せしを以て、特に、諸人の賦稅を免ず、諸人、皆、悅服せざるはなし。

庸劣の義昭、信長の勢力を忌みて、之れを除かんと欲し、自己の力をも、揣らずして、妄りに、兵を動かし、一敗、復た起つこと、能はざるに至る。

足利氏の天下、是に於てか亡ぶ、代を傳ふること十五代、年を經ること、二百三十八年。

日本史蹟大系

第九卷

昭和十一年三月九日印刷
昭和十一年三月十三日發行

〔二圓八十錢〕

著者　熊田葦城

發行者　下中彌三郎
東京市日本橋區吳服橋三ノ五

印刷者　關口一男
東京市日本橋區吳服橋三ノ五

印刷所　單式印刷株式會社
東京市芝區芝浦一ノ二三

發行所　株式會社平凡社
東京市日本橋區吳服橋三ノ五
振替　東京二九六三九番
電話日本橋〔二一一五七番
二一一五八番
二一一五九番

670
25